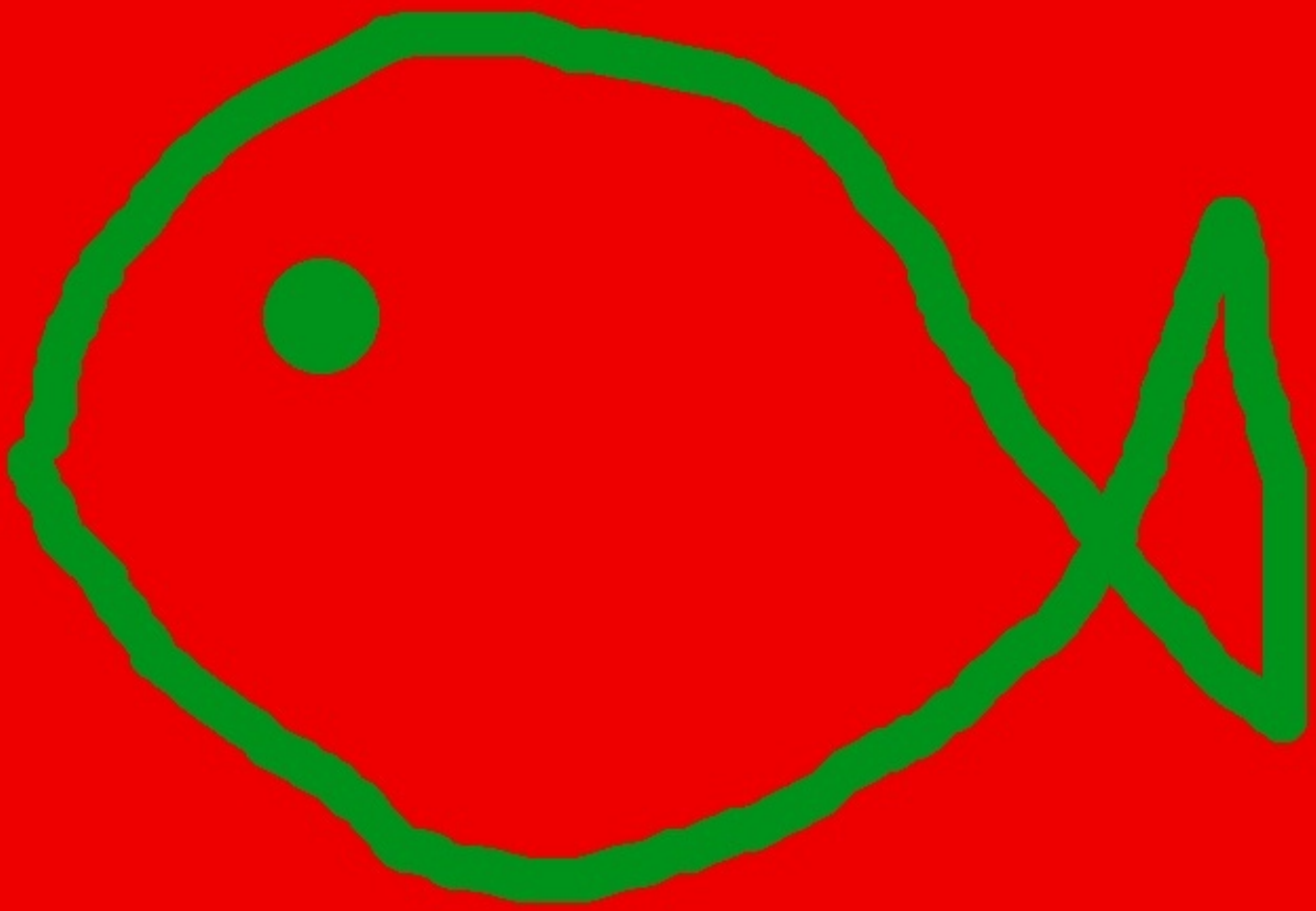
I'm



sorry

『アイム・ソーリー』

「すみませーん。あの…」

駅のトイレで用を足し終え、手を洗っている俺に声がかかる。蛇口の水を止めながら小さな鏡越しに後ろを覗くと、一番奥の個室トイレが閉まっている。

「あの…まだそこに居ますか？紙が切れちゃってて…」

このトイレには予備の紙が置いてない。運のない人もいるものだな、そう思いながらもズボンの後ろポケットからティッシュを出す。つい今、サンタクロースの格好をした若い女性が駅前で配っていたものだ。

「ちょっと待って下さいね。上から投げますよ」閉まっているドアの前に立つ。スライド式の施錠によく見られる、赤い『入ってます』のサイン。俺は閉まっているドアの上の隙間にポケットティッシュを投げ入れた。

「あ、ありがとうございます。あぁー!!!」

悲痛な叫びが聞こえる。

「どうしました？」

「…便器の中に落としちゃいました…」

思わず吹き出しそうになった。ツイてないにもほどがある。

「いいですよ、また貰ってきてあげますから待ってて下さい」

俺はトイレから出ると、先程の『女性サンタクロース』に自分から近づいていきポケットティッシュを貰う。何故ここまで俺が親切か。時間を持て余しているからだ。

12月24日。クリスマスイブ。

世の中は、遠い昔にいたというオッサンの誕生前夜祭をまるで自分の誕生日のように盛り上げ、はしゃいでいる。恋人がいれば、何とも素晴らしい夜になるのだろうが俺には遠い異国の出来事のようにさえ思える。そのうえ原因不明の脱線事故で電車が動かないので帰ろうにも帰れない。幸い、怪我人などは一切出なかったらしいが、これから誰かに会いに行く人にとってこれほど苛立たしいことはない。『待っている人』がいないというのが、せめてもの救いだというのは何という皮肉だろう。

トイレに戻って先程と同じ要領で紙を投げ入れる。今度は上手くいったらしい。

「あ、ありがとうございます。助かりました」

「いえいえ、漫画みたいで面白かったです」ドア越しの奇妙な会話。トイレの水が流れる音を背に外に出る。

時間を潰す方法を考える。時期が時期だけに凍えるような寒さだった。外で過ごすという選択肢は考えられない。時刻は午後六時を過ぎており、駅前のネオンはそれぞれが強い主張を放っている。

コンビニ・居酒屋・金融機関・携帯メーカー・大型ディスカウントストア…お世辞にもイルミネーションとは言い難い。さんざん迷った挙句、漫画喫茶で時間を潰して携帯電話で運行再開のニュースを待つことにした。

駅を出たすぐ右手に漫画喫茶があった。その入口に本が落ちている。

『メリー・ギャグ・クリスマス』

表紙にセンスのないデザインでそう書かれていた。きっとこの店のものだろう。それを拾い上げてそのまま店内に進む。フロントで簡単な料金プランの説明を受け、会員カードの提示を求められた。同系列店舗の会員カードを出す。この漫画喫茶の系列店は魚のマークで有名だった。

対応してくれた若い男性スタッフに入り口に落ちていた本を手渡すと「この店のものではない」と返されてしまった。

三時間の料金プランを選び、個室に入ると『メリー・ギャグ・クリスマス』に目を通す。特に変わったものではなく、ひたすら四コマ漫画が羅列してあるだけだった。表紙をめくってすぐのページに手書きの四コマ漫画が載っていた。間に合わせで描いたような、言ってしまえば雑で出来の悪いものだった。

「クリスマスに一人ぼっちの男にサンタクロースの格好をした若い女性が言い寄ってきた。仲良くなって、いよいよ服を脱がしてみると男だった。」というものだ。

それ以外のものはそれなりにしっかりと描かれていて「中年男性が年甲斐もなくプレゼントを楽しみにしている。朝起きて、靴下の中をのぞくと、強力な消臭剤が入っていた。」だとか「サッカーグラウンドくらい大きなプレゼントの箱を開けたら一回り小さい箱が入っていた。それを開けるとまた箱が…延々箱を開け続けていたらいつのまにか来年のクリスマスになっていた。」など。

中でも一番バカバカしかったのは「ミニカーセットが欲しい少年は『煙突がない家にはサンタクロースは来ない』と友達に聞かされ独学で煙突を作り上げた。その出来の良さが評判となり煙突設計の依頼が次々に舞い込んできて大金持ちに。少年の親はそのお金で少年に本物のスポーツカーを買い与えたが、免許のない少年はその車を羨ましがった青年にある条件付きでそのスポーツカーをあげてしまった。その条件が『ミニカーセットとの交換』だった。」というものだ。
本の最後には仰々しく「サンタ苦労ス」と書かれている。まったく最後までバカバカしい。

電車の運行再開はまだだったが、三時間経ってしまったので会計をする。よほど店が暇なのか、先程の若い男性スタッフが話しかけてきた。
「さっきの本、やっぱりうちの店のものだったみたいです」
「あぁ、そうですか」そう言って彼に本を手渡す。
「この本、面白かったですか？」
「どうですかね。そんなには」
「どんな話なら面白いですかね？ボク、漫画家を目指してまして」
外に出ても寒いだけなので立ち話を続けることにした。
「トナカイが仕事をボイコットしたら笑えるかもね」俺はこれ以上ないくらいに適当に応えた。

「そりゃ笑えますね。そうなったらサンタクロースは失業手当を貰わなきゃ暮らしていけない」
「サンタクロースって爺さんだから年金でなんとかなるでしょ」くだらない会話をしながら俺は去年のクリスマスを思い出していた。

去年のクリスマス。俺は当時付き合っていた彼女と、夜景の綺麗なレストランで食事をしていた。赤ワインが好きな彼女はグラスの深紅と夜景を重ね合わせてうっとりとしていた。プレゼントはブランド物のバッグで、八万円くらいしたと思う。
彼女の喜んだ顔は今でも覚えている。
その翌日だった。「別れましょう」と言われたのは。混乱した。冗談だと思ったし、実感がなかった。今思えば、彼女の熱は冷め切っており、プレゼントを貰えるクリスマスまでは我慢して付き合っていたということだろう。あの喜んだ顔は「やっとおさらばできる」という意味の笑顔だったのだ。

「そろそろかな」
彼の言葉で我に返った。電車が動き出したのだろう。彼はフロントから出てくると「付いてきて下さい」とそのまま出入り口に向かった。店を出ると彼と同い年くらいの青年がサンタクロースの格好をして立っていた。こちらに手を振って近づいてくる。
「本当にあわてんぼうだな」そのサンタクロースの格好をした青年が言った。
「だって急だったからさ」どうやらバイト仲間らしい。
じゃあ、と彼は俺に手を振ると店に戻らずそのまま路地裏に向かおうとした。

「ちょっと、仕事は？」驚く俺を見て驚く彼。
「何言ってるんですか、これから仕事に戻るんですよ」
「何？お前、ちゃんと話してないわけ？」彼の友人は踵を返すとこちらに向かってきた。
「時間がなくてさ」言い訳を捻り出すような表情で彼も戻ってきた。
「簡単にお話ししますね」彼の友人は手振り身振りを交えながら喋りだした。
「電車の脱線事故がありましたよね？あれはコイツのせいなんです。コイツのソリが電車とぶつかったんですよ。急に腹を壊してトイレに行こうとしたんですね」同僚のミスに愛想を尽かしたような口調だ。
「アイム・ソーリー」
後ろの彼が小声で呟いた。
「で、用を足したはいいけど、トイレに紙がなかったもんだから、あなたにお願いして取って来てもらったわけです。その御礼をしようとコイツは色々とやってたわけですよ」
「ちょ、ちょっと話が見えてこないんだけど…ソリが電車とぶつかったとか…」
「あぁ…そうですよね。ボクたち、サンタクロースなんですよ、本物の。仕事中にコイツが事故ってボクが迎えに来たところなんです。まぁにわかには信じてもらえないでしょうけど」
何だか面倒くさい人たちに関わってしまった。第一、トイレの人と漫画喫茶の彼が同一人物なら、トイレを出てから先回りしたことになる。しかも俺が漫画喫茶に入るかどうかも分からないのに。
今度は後ろの彼が喋りだした。
「あぁ、そのことですか。だって『漫画みたいで面白かった』って言ってたから漫画好きだろうと思って。この『メリー・ギャグ・クリスマス』もボクがわざと入り口に落としたんですよ。まぁそ

こはある種、賭けでしたね」
まるで俺の心を読んでいるかのような返答だった。
「サンタクロースは人の心が読めるんですよ。ボクはまだ新人だからそこまで深くは読めませんけど」
何がなんだか分からない俺に彼は続けた。
「この本、実はボクが描いた本なんですよ。ボクの地元じゃそこそこ評判良かったのに…そんなに面白くないってのはちょっとショックだったなー」彼は下唇をグイッと出していじけてみせた。
まぁそういうわけで、と話を切り上げこの場から立ち去ろうとする二人。イタズラにしては手が込んでいる。
「だーかーらー！イタズラなんかじゃないですってば！それから、サンタクロースは爺さんばっかりじゃないですからね。ボクたちみたいに若いのもいますよ」
まぁまぁと彼をなだめる友人。軽い会釈をして路地裏に続く角を曲っていった。慌てて追いかけ路地裏を覗くと二人はもう消えていた。何だったんだろう。しばらくその場から動けなかった。

「あのぉ…」
背後に声がして振り向くと女性が立っていた。どこかで見た顔だ…彼女の顔を見つめながら記憶の

引き出しを引っ掻き回す。
あぁ、サンタクロースの格好でポケットティッシュを配ってた女性だ。仕事を終えたらしく私服に着替えていた。白のコートがよく似合っている。
「何ですか？」
「いや…若い男の人があなたにコレを返してくれって」
彼女が差し出したのは使いかけのポケットティッシュだった。よく見ると、テッシュに何か書いてある。
「何か書いてありますね」彼女はいぶかしみながら俺の手元を覗いてくる。
『トイレでは本当にお世話になりました。去年のクリスマスは散々だったみたいですから今年は素敵な出逢いがあると思いますよ。　メリークリスマス』
文の最後にはさっきまでいた店の魚のマークが描かれていた。
俺は彼女の顔をもう一度見つめた。
「失礼だけど……」俺は言葉に詰まる。
「キミ、お、男じゃないよね？」
「何言ってるんですかぁー」彼女の目が垂れる。すごく可愛らしい笑顔だ。
もう一度路地裏に目をやる。
ヒュッと冷たい風が吹いた。電車はまだ動きそうもない。
「もしよかったら、ご飯でも一緒にどうですか？面白い話があるんですよ」

おしまい。